教皇庁 信徒評議会

高齢者の尊厳と使命

カトリック中央協議会

教皇庁 信徒評議会

高齢者の尊厳と使命

カトリック中央協議会

PONTIFICAL COUNCIL FOR THE LAITY
Documents

The Dignity of Older People and Their Mission in the Church and in the World

もくじ

序文……5
一　高齢期の意味と価値……10
二　聖書の中の高齢者……16
三　高齢者に関する問題はわたしたちみんなの問題……25
四　教会と高齢者……31
五　高齢者司牧のための指針……38
結び……48
注……52

序文

科学の成果と日進月歩の医学によって、この十数年来、人の平均寿命は著しく伸びています。「高齢者」は、すでに世界人口のかなりの部分を占めています。まだすばらしい潜在能力と共同善に参加する能力を持ちながら、生産の第一線から退いていく人もいます。人口統計学者が高齢者を分類して、「前期高齢者」と定義するこの厚い層の人たち(65歳〜75歳)の先を、「後期高齢者」、すなわち75歳以上の人たちが歩いています。この集団も増大の一途をたどっています(1)。

平均寿命が伸びている一方、他方では出産率の深刻な低下があり、ピラミッド型だった年齢層がここ五十年足らずで、文字どおり逆さになるという、前代未聞の統計学的推移が見られるようになりました(2)。高齢層は増える一方で、若年層は減少するばかりです。北半球の国々では、この現象は六〇年代から始まり、現在は南半球の国々でも始まっています。そして、そこでは、高齢に向かう速度がもっと早まっています。

この種の「静かな変革」は、人口統計学的分野をはるかに越えて、社会的、経済的、文化的、心理学的、精神的秩序の問題を突き付けています。その重大性にいち早く注目した国連は、すでに一九八二年(七月二十六日〜八月六日)、オーストリアのウィーンで、人口の高齢化問題に関しての世界会議を開きました。この会議中、「高齢化に関する国際行動計画」が作成されましたが、これは今日においても、なお世界レベルの基準となっています。その後、さらなる研究の結果、十八条からなる「高齢者のための国連原則」が打ち出されました。この原則は五部門(独立、参加、保護、自己達成、尊厳)から成っています(3)。さらに同原則は、毎年十月一日を「国際高齢者の日」と制定しました。

国連が一九九九年を「国際高齢者年」と宣言し、そのテーマを「すべての世代のための社会をめざして」と決めたのは、その重要性を裏づけています。一九九八年、国際高齢者の日のメッセージの中で、コフィー・アナン国連事務総長は次のように強調しています。「すべての世代のための社会は、高齢者を病弱者とか年金暮らしだと軽視せず、それどころか、彼らを発展の原動力であり、受益者だと見なす社会です」。したがって、すべての世代のための社会とは、高齢者が持っているすばらしい潜在力の発揮を可能にする、適切な生活条件を作るために、努力を惜しまない社会です。

使徒座は、連帯感を鼓舞する社会組織に基礎を置き、そこで各世代がそれぞれ他の世代と一致して貢献する、という国連の意図を高く評価します。そして、この問題をめぐる反省、考察の分野で、また採択した行動計画の分野で「国際高齢者年」に協力したいと願っています。

教会は、高齢者の尊厳と基本的人権に言及し、また高齢者にはまだまだ社会生活において発言すべきことがあり、与えることができると確信し、すべての人が強い責任感をもって、この問題に取り組んでほしいと念願しています。すなわち個々人、家庭、協会や連盟、政府、国際機構は、それぞれの権限と義務に応じて、また、きわめて重要な相互補助の理念に従って、この問題に関与していただきたいのです。このようにして初めて、ますます人間らしい生活条件が保障され、経済的、文化的変化のめまぐるしい社会にあって、高齢者は余人をもって替えがたい自らの役割を遂行する、という目的を追求することができるでしょう。このようにしてのみ、社会、経済、教育の分野に大きな影響を与えるイニシアティブを、組織的に始めることができるでしょう。従来の、そして新たな必要を満たし、権利の実際的擁護を保証するためになくてはならない供給、援助の源が、すべての市民にとって、差別なく、得やすいものとなるように。また、社会生活から遠のいた人には、信頼と希望、社会生活への積極的参加と所属の理由を取り戻してもらうために。

高齢者に対する教会の使命と配慮は、今に始まったことではありません。教会は、過去数世紀にわたり、多種多様な状況の中で、それを自らの使命と自覚して、高齢者の司牧的世話にあたってきました。キリスト教的「愛徳」は、とくに、諸修道会と諸信徒団体の自発的行動と心遣いのおかげで、高齢者の必要としているものを理解し、より多様な老人福祉事業を起こしてきました。教会は、これを純然たる社会福祉の問題と見なすにとどまらず、第一の重要性は、あらゆる年齢の人々の能力を十分に生かすことだ、とつねに主張してきました。人生において積み重ねた人間的、精神的富、経験と助言の蓄積が霧散してしまわないようにと、皆に注意を促しながら。それを裏づけるかのように、一九八四年三月二十三日の謁見で、八千人ほどの高齢者グループに、教皇ヨハネ・パウロ二世は次のように話しています。「内面的孤独という誘惑に付け込まれてはなりません。あなたたちが抱えている問題がどうであろうと……次第に衰えてゆく体力、社会的組織の不備、法制化の遅れ、エゴイスティックな社会の無理解にもかかわらず、皆さんは自分が教会生活の脇に置かれていると感じたり、息を切らして動き回る人々の目立つ世の中で、自分を役立たずの消極的な人間だと感じてはならず、またそうであってはならないのです。それどころか、皆さんは人間的に、精神的に人生の豊かな時期を生きている活動的な主体としての個人なのです」(4)。

しかしながら、現状は少なからぬ面で、教会に前期高齢者と後期高齢者に対する司牧の見直しを求めています。高齢者がより必要としているものと、その精神的期待にもっとこたえる新しい形態と方法の研究が必要です。また、生命とその意味、その目的の擁護という土壌に根ざす司牧計画とその実施は、教会の使命に貢献するよう高齢者を励まし、教会共同体生活への彼らの積極的な参加によって、精神的な特別な利益を引き出すために、実際に、不可欠な条件であるように思われます。

これが、教皇庁信徒評議会の本文書の趣旨であり、大筋です。本文書の作成に携わったのは、ローマ教皇庁の国務省と幾つかの省の代表者のほかに、高齢者の中で働き、この分野で長い経験を持つ教会内の諸運動、諸団体、諸修道会の代表から構成されるグループです。司教協議会、司教、司祭、男女の修道者、信徒たちの諸団体、青年、成人、高齢者の皆さんのお手元にこの文書をお届けします。教皇庁信徒評議会――「国際高齢者年」のために、使徒座の活動を調整する「核」となるよう指名された――は、それぞれが省察と責任遂行の指針として、本文書をご利用くださるよう願っています。

一　高齢期の意味と価値

今は昔に比べてずっといい健康状態で長寿を享受することが期待でき、人々の教育レベルが上昇したこともあって、それは利益を引き出す可能性につながります。高齢者といえば、だれかに依存し従属する者と見なされることはもはやなく、したがって生活の質を低下させられることもありません。しかし、こういう事実だけでは年を取ることの否定的なイメージを払拭し、現代人の多くが避けられない、耐えがたい不幸だと、いちずに思い込んでいる人生の一時期を、積極的に受容させるためには十分でないように思われます。

今日、広く行き渡っている、老齢期に対するイメージは、衰退であり、したがって人間的にも社会的にも無力なのは当然だ、というものです。しかしこれは、実際はもっとずっと多面的であるはずの高齢者の状況を明らかにしていない紋切り型のイメージです。というのも、高齢

者たちは均質の人間の集まりではありませんし、また、きわめて多様な流儀で生きているからです。人生の旅路において年齢が持つ意味を肝に銘じている人々は、この時期を平静に、毅然として生きるだけでなく、成長し、責任感を培う新たな好機として生きています。しかし他方、この年齢の節目を、一種の機能障害の訪れだと考えている高齢者たちがいます。しかも今日、その数はおびただしいものと思われます。この人たちは自らの老いを前にして、消極的なあきらめから反抗へ、また絶望的な拒否へと心の姿勢を変えていきます。心を閉ざし、自分自身を疎外し、心と体を衰弱するに任せます。

したがって、前期高齢期と後期高齢期の様相は、高齢者の数ほどあり、また、人はおのおの自分の全人生をかけて、自らの老境の生きざまを準備するものだ、と断言していいでしょう。その意味で、老いはわたしたちと一緒に育ちます。わたしたちの老年の質は、単に人間的な面にしろ、信仰の面にしろ、何といってもわたしたちが自らの老いの意味と価値を、いかにつかむかにかかっています。ですから、高齢期を、愛にまします神の摂理の計画のうちに位置づけ、キリストが御父の家へとわたしたちを導かれる旅路だと思って、これを生きねばならないのです(ヨハネ14・2参照)。信仰の光を浴び、欺くことのない希望に強められて(ローマ5・5参照)、初めてわたしたちは老いをたまものとも任務とも思い、ほんとうにキリスト教的に生き

ることができるでしょう。寄る年波にもかかわらず前進し続けることができるのは、精神の若さという秘訣です。この意味で、百六歳になるリンダと呼ばれる女性はすばらしい証言を残しています。彼女は百一歳の誕生日に、ある女友だちに次のように打ち明けています。「わたしは百一歳になったけど、しっかりしているつもりよ。体はあちこち思うように動かないけど、精神で何もかもやり抜くの。体にじゃまされてたまるものですか。体には屈しないわ。老いに服さないから老いを生きてもいない。そりゃ、寄る年波には勝てませんよ。でもわたしはそれを重視したりしません。老境にあって、ただ一つの生き方は、神さまのうちに老いを生きることだと思うの」。

高齢に対する現代の否定的見方を正すことは、全世代を巻き込まなければならない文化的、教育的急務です。わたしたちには高齢者が自らの年齢の意味をしっかりとつかむように支援してゆく責任があります。つまり、高齢の人たちが、自らの真価を知り、拒絶、孤立、自分は役立たずだという、あきらめ、空しさ、絶望などの誘惑を克服するように手助けする務めです。また、今日、わたしたちには未来の世代に対する責任もあります。それは、一人ひとりが高齢期という人生の一つの節目を、尊厳をもって精一杯生きることのできる、人間的、社会的、精神的な環境を準備する責任です。

人口の高齢化問題に関する国連の世界会議にあてたメッセージの中で、教皇ヨハネ・パウロ二世は次のように断言しています。「生命は、愛ゆえに人間をご自分の似姿として創造された神の、人間へのたまものです。人格の侵すべからざるこの尊厳を理解するなら、当然、人生のすべての段階に価値を与えるはずです。それは一貫性と正義の問題です。もし、受胎の瞬間からの胎児の生命に価値を与えないなら、お年寄りの生命に価値を与えることは不可能です。生命が、もはや、譲ることのできない神聖な恵みとして尊重されないなら、人間はどこに行き着くか、だれにも分かりません」(5)。

切望される多世代社会の建設は、人生のすべての段階に対する尊敬の念を礎にしてこそ初めて持ちこたえるでしょう。現代世界における多くの高齢者の存在は、一つのたまものであり、人間的、精神的新しい富です。それは、十分に理解され、受け入れられるならば、市場、国家、そして現代に普及しているメンタリティーが人生に付与する偶然の意味をはるかにしのぐ人生の意味を、今日の人間が再発見するのを助ける、時のしるしです。

わたしたちの社会と文化が、人間性あふれるものになる過程で、高齢者の経験がもたらしうる寄与は非常に貴重であり、高齢者固有のカリスマを特徴づけるものとして高く評価しつつ、強く求められなければなりません。

無償――現代社会に浸透している文化は、わたしたちの活動の価値を、効率主義という判断基準で決め、無償という側面を無視しています。人のために役に立てる時間がある高齢者は、利他的な活動の推進力を軽んじ、くじけさせ、阻む無関心の壁を打ち破る必要を、働き過ぎの社会に再び認識させることができます。

記憶――より若い世代は、歴史の意味を自らのアイデンティティーとともに失いつつあります。歴史の意味を過少評価する社会は、青年たちを養成する課題を避けて通ることになります。過去を認めようとしない社会は、簡単に間違いを繰り返す危険があります。世代間の対話を阻んで、高齢者たちを遠ざけ、孤立させる生活システムも、歴史の意味の衰退の起因となっています。

経験――今日、わたしたちは、科学や技術がもたらす解決が、高齢者の積み重ねた経験の有用性に取って代わったかのような世界で暮らしています。この文明のバリアに対して、前期高齢期、後期高齢期の人々は意気消沈してはならないのです。というのも、この人々には若い世代に言い残すべき多くのこと、若い世代と分かち合うべき多くのものがあるからです。

相互依存――だれも一人では生きていけません。しかし、はびこるひとりよがりや目立ちたがりは、この真実を覆い隠しています。お年寄りたちは仲間づきあいを求めることで、人間

社会の本来の姿、人間の相互依存、社会的かかわりのネットのほつれを繕う必要に注意を払うよう、また、弱い者がしばしば自暴自棄になるような社会に異議を申し立てます。

人生のもっとも完成された一つのビジョン――わたしたちは、多忙、いらだち、不安、ストレスに悩まされて暮らしています。そして、そういうことに惑わされ、気を取られて、人間の召命や尊厳、その行方にかかわる根本的な問題を忘れてしまいます。高齢期は、人間が単純さを取り戻し、観想に向かう時期です。高齢者が生きてきた情感的、倫理的、宗教的価値は、社会、家族、人々の均衡には欠かせない要素です。これらの価値は、責任感から友情にまで、権力の追求否定から思慮深さ、忍耐にまで、何かを生み出すことを重んじる内面生活から、平和の構築にまで及びます。高齢者は、「存在すること」が、「行動すること」や「所有すること」にまさる、と得心します。高齢期のカリスマから得られる利益を真に理解すれば、人間社会はよりよいものになるでしょう。

二　聖書の中の高齢者

高齢期の意味と価値を深く理解するには、聖書をひもとかねばなりません。神のみことばの光に導かれてのみ、わたしたちは人生のこの季節の精神的、倫理的、神学的次元の全容を探ることができます。前期高齢期、後期高齢期の意味を再考するはずみともなればと思い、現代社会の中で高齢者が直面している問題に対する考察と反省を添えて、ここに聖書からいくつかのヒントを引き出してみました。

「長老を尊びなさい」（レビ19・32）

旧約聖書の中では、年老いた人に対する尊敬の念は、おきてともなります。「白髪の人の前

では起立し……あなたの神をおそれなさい」（レビ19・32）。さらに、「あなたの父母を敬え」（申命記5・16）。両親を、とくに年老いた両親を引き立て心にかける、きめ細やかな勧告がシラ書の第三章に記されており、かなりものものしい次のような言葉でしめくくられています。「父を見捨てる者は、神を冒瀆する者、同じく母を怒らせる者は、主にのろわれている者」（シラ3・16）。今日広く行き渡っている、高齢者を無視し、片隅に追いやり、放置する傾向をくい止めるために、若い世代を「教育する」ように努めなければなりません。青少年、中高年者、高齢者はお互いを必要としているのです。

「神よ、われらはこの耳で聞いています
先祖がわれらに語り伝えたことを
先祖の時代、いにしえの日に
あなたが成し遂げられたみわざを」（詩編44・2）

父祖たち（モーセ以前）の物語は、この問題をことのほか雄弁に描いています。モーセが、柴は火に燃えているのに、柴が燃え尽きないのを不思議に思ったとき、神は柴の間から声をかけ、

ご自分を啓示なさいました。「わたしはあなたの父の神である。アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」（出エジプト3・6）。神はご自分の名を、イスラエルの信仰の正当性と保証の象徴である偉大な老人たちに結び付けておられます。息子、若者は、つねに、父たち、高齢者によってのみ、神と出会います。というよりも、神を「迎える」といえるかもしれません。前述の引用箇所では、三人の父祖を名指し、「……の神」と書かれています。それは、この父祖たちがそれぞれ自分の神を体験したことを意味しています。また、この神体験は、高齢者の遺産であり、彼らの内面的若さの、死を前にした彼らの安らぎの理由でもありました。受け継いだものを伝えることによって現在の意味を明らかにするのは、矛盾するようですが、高齢者なのです。記憶もなく未来もない、ある種の永遠の若さをほめそやす社会にあって、これは反省を促します。

「白髪になってもなお実を結ぶ」（詩編92・15）

肉体的な限界と困難という刻印を押されていても、老齢者のうちに神の力が現されることはありえます。「神は知恵ある者に恥をかかせるため、世の無学な者を選び、力ある者に恥をか

かせるため、世の無力な者を選ばれました。また、神は地位のある者を無力な者とするため、世の無に等しい者、身分の卑しい者や見下げられている者を選ばれたのです。それは、だれ一人、神の前で誇ることがないようにするためです」（一コリント1・27－29）。もはや若くはなく、弱く、子孫を残すことのできないもろい肉体をとおしても、神は救いの計画を実現されます。こうして、子を宿せないサラの胎から、また、およそ百歳になっていたアブラハムの体から神の民は生まれました（ローマ4・18－20参照）。さらに、子を宿せないエリサベトの胎から、またすでに年老いていたザカリアの体から、キリストの先駆者となる洗礼者ヨハネは生まれました（ルカ1・5－25参照）。たとえ寄る年波には勝てず、日々衰えるにしても、高齢者は自分が救いの歴史のための道具である、と信じる道理があります。「生涯、彼を満ち足らせ、わたしの救いを彼に見せよう」（詩編91・16）と主は約束されます。

「青春の日々にこそ、お前の創造主に心を留めよ。
苦しみの日々が来ないうちに。
『年を重ねることに喜びはない』と

言う年齢にならないうちに」（コヘレト12・1）

老年に対するこの旧約聖書のアプローチの、率直で飾り気のない客観性には心を打たれます。そのうえ、詩編作者が思い出させるように、人生は息のように消え失せ、いつも軽やかであるとはいえず、痛みがないとは限りません。「人生の年月は七十年ほどのものです。健やかな人が八十年を数えても、得るところは労苦と災いにすぎません」（詩編90・10）。コヘレトのこの言葉は、象徴的なイメージを用いて老衰と死について延々とつづられ、老人の苦い肖像を描いています。旧約聖書はここで、不自由やさまざまの問題や苦悩が待つ高齢期について幻想を抱いてはならないと自戒を促します。そして全生涯にわたり、つねにそして何よりも、挫折として生きられた老年がもたらす恐怖におののくときに神を見つめよ、と勧めます。というのも、神はつねにわたしたちがめざしている到着点なのですから。

「アブラハムは長寿を全うして息を引き取り、満ち足りて死に、先祖の列に加えられた」
（創世記25・8）

聖書のこの一節は、現代的意義を持っています。現代世界は、世の初めから神によって人間

の良心に刻まれた人生の意味と価値に関する真理を見失いました。そして、それとともに老いと死の完全な意味も見失いました。今日、死はその神聖な性格とそれを全うすることの意味を失いました。死はタブーとなり、なるべくだれの目にも付かずに済むように、心を乱されずに済むように、万端ぬかりなく覆い隠されます。死のシナリオも変わりました。何よりも、自宅で亡くなるお年寄りの数はますます減り、自らの共同体から引き離されて、病院や施設で亡くなるお年寄りの数はますます増えています。葬式やそれにかかわる儀式を見かけることも、とくに都市では少なくなりました。今日の人間は、マスメディアによる死の日常的描写を前にして、まるで麻酔でもかけられたかのように、狼狽と不安と恐怖を人に抱かせるこの現実が訪れるのを、何としても避けようとします。そういうわけで、自らの死を寂しく一人で迎えるのも避けがたくなります。しかし、人となられた神の御子は、十字架上で、死の意味を逆転させ、信じる者に希望の扉を開け放たれました。「わたしは復活であり、いのちである。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない」（ヨハネ11・25－26）。このみことばに照らすと、死――もはや罰ではなく、無に帰する理不尽な人生の結末でもない――は、主なる神と差し向かいになる、はつらつとした、確かな希望の時としてその姿を現します。

「生涯の日を正しく数えるように教えてください。
知恵ある心を得ることができますように」（詩編90・12）

「長寿のカリスマ」の一つは、聖書によれば、賢明さです。しかし、この賢明さは年を取れば自然に付いてくる特権ではありません。高齢者が到着点として受け入れ、予定しなければならない神のたまものなのです。「生涯の日を正しく数える」のを知ること、すなわち、神が、一人ひとりに授けておられる時間を責任をもって生きることを可能にする、心の知恵を追求することでそれを得ることができます。この知恵の核心は、人のいのちのもっとも深い意味と、神のうちに生きる人の、自然を超える行き先、「到着点」の発見です。そして、この知恵が若い人にとって重要であるとすれば、「ただ一つだけ必要なこと」（ルカ10・42参照）を決して見失わず、自分の人生の方向を定めるよう呼びかけられている高齢者にとってはなおさら重要です。

「主よ、みもとに身を寄せます。

とこしえにわたしを恥に落とさないでください」（詩編71・1）

その美しさで際立っているこの詩編は、聖書の中で出会う老人たちの、また主のみ前にいる魂の宗教的感情を証言する多くの祈りの中で唯一のものです。祈りは、高齢の人たちが自分の人生を理解するための、もっともすぐれた手段です。祈りは一種の奉仕であり、全教会と全世界の善のために、高齢の人たちが果たすことのできる役務です。重い病を患っているお年寄り、あるいは寝たきりのお年寄りにも祈ることはできます。お年寄りにとって祈りは力であり、生活です。祈りをとおして、高齢の人たちは、他の人々の喜びと苦しみに参加し、孤立の壁を打ち破って、無気力な不毛の状況からの脱出を可能にします。祈りは、高齢の人がどのようにして観想者になりうるか、という問題につながる重要性を持っています。老い衰え、体力の限界に達した高齢者は、寝たきりのままで、その祈りによって一人の修道者、隠修者ともなり、世界を抱擁します。生涯にわたって社会で精力的に活動してきた人が観想者になるのは、おおよそ不可能なことのように思われます。にもかかわらず、人生には突破口が開く瞬間があり、それがだんだんと広がっていって、全人間共同体の利益となるのです。祈りはその最高の突破口です。というのも、「刷新は、それが社会的なものであっても、観想から生じない刷新はない

からです。祈りのうちに神と出会うことは、歴史の中に力を導き入れ……、その力は多くの心に触れ、回心へ、刷新へと導き、まさにその中で、社会的構造を変革する歴史的な巨大な力となります」(6)。

三　高齢者に関する問題はわたしたちみんなの問題

疎外

現代の高齢者を、たぶん他の問題よりもたびたび悩ませている問題の一つは、人間の尊厳を傷つけるものです。それは疎外です。この現象は、比較的最近になって、社会にその育ちやすい領域を見つけ、広がりつつあります。その社会は、能率一辺倒で、永遠に若い人間という上塗りされたイメージで固まり、この要件から外れている者をその周囲からのけ者にします。

政治レベルの責任の回避と、その結果としての社会的欠乏、貧しさ、あるいは所得や、品位ある生活と適切な治療を享受する可能性を保証するに足る経済的資本の大幅削減、多かれ少なかれ進行する、社会的環境と家庭からの高齢者の排除は、人間共同体と市民生活の端に多くの高齢者を追いやる要因となっています。

この疎外というもっとも悲劇的な側面は、人間関係の欠如です。これは高齢者に、人との人間的かかわりを断たせるだけでなく、放置され、孤独と孤立を余儀なくさせられるという苦痛を味わわせます。家族との、また社会との触れ合いが少なくなるのと相まって、文化的な刺激、情報、方策も少なくなっていきます。高齢者は自分の置かれた状況に対して無力感を味わいます。というのも、家族の一員としても一市民としても、自分にかかわる取り決めの過程に参加することを阻止され、自分がその一員である共同体に属する意味を失うようになるからです。

これは、すべての人にかかわる問題であり、社会全体の問題です。社会はそのさまざまな要件の中で、社会、経済、情報において非常事態にある少なからざる人々の具体的保護を法的にも保障するために介入しなければならないでしょう。

医療介護

今日もなお、病気の高齢者の医療介護は、家族がいなかったり、また経済的手段がなかったりして自分で対処するのは困難です。そこで、法制化された老人医療システムがますます必要となってきます。しかし、老人病院や老人保健施設への入院、入所は、社会から人を隔離することにもなりかねません。過去において、さまざまな社会的、文化的状況の中で評価されてい

た、いくつかのすぐれた社会福祉事業と、そこから派生した諸施設は、もはや時代遅れとされ、ある種の新しい人間的感性と対立しています。現在の社会を築き上げるために貢献した最高齢の世代に対して、自らの義務を認識している社会は、高齢者に適した病院や保健施設作りをおろそかにはしないはずです。それができるところでは、高齢者が住み慣れた環境で介護が受けられるよう、在宅ケア、デイサービス、ショート・ステイ・サービスなどの施策を進める必要があります。

そういうわけで、高齢者のためのレジデンス、つまり商店や病院など生活環境のすべてが整った住宅地について言及するのは、的外れではないでしょう。自分の家を去らねばならなかった人たちを受け入れること自体、このようなレジデンスには、人それぞれの自主性とパーソナリティーが尊重され、自らの関心と興味に基づく活動を展開する可能性が各自に保証され、加齢に伴う必要な医療介護が受けられることが、ますます要求されます。そしてこの居心地よいレジデンスは、家族的次元に限りなく近づけられます。

養成と雇用

今日のものの考え方として、養成を専門的働きと緊密に結び付ける傾向があります。高齢期

に入った人たち向けの職業プログラムと養成が欠如する理由はそのあたりにあるようです。継続的なトレーニングと研修が、急速な技術革新と歩調を合わせるためにも、物質的利益を得るためにも欠かせない時代には、高齢者――その知識がもやはり労働市場に結び付かないと考えられている――は、継続的教育方針から外されます。そして、彼らのいや増す就職意欲とその意味での期待は無視されます。

労働市場とそれに関する一切のことからの閉め出しは、今日、何の前触れもなく、確実な形をとって降りかかります。そして関係当事者が望んだ時と方法に合わせてそれが遂行されることは、きわめてまれです。解雇された者の多くは、報酬として、皆無とまではいかなくても、不十分な年金しか支払われないこともあり、彼らは空しく再就職の口を探します。高齢者にも仕事をする可能性を提供し、自分の創造力を発揮し、その生活の精神的な面を発展させるチャンスを与えて、この経済的保障の要求が実現されなければならないでしょう。

すでに経験済みのことですが、定年制は高齢期に入る以前の過程で組み入れられるので、賃金生活は年金受給年齢になっても続けられ、それまでの生活レベルを保って、効果のある利益をもたらします。したがって、高齢者に積極的役割を返し、最新のテクノロジーへの入門を促し、社会的に役立つ仕事に再就職させ、奉仕作業やボランティア活動に招き入れるために、高

齢者が持つ余暇は一考に値することです。

参加

機会があれば、高齢者が社会生活に積極的に参加するのは、市民的、文化的、連帯的な側面からみて当然なことです。数多くの年金生活者で占められている、責任のある重要なポストが、それを証明しています。たとえば、介護活動を中心とした市民レベルの組織的ボランティア活動団体における彼らの政治的影響は、見過ごすことができません。高齢者に関する偏見や、ゆがめられた心象など、現代社会が損ねたり、逸脱させたりした老人像を正していきたいものです。

高齢者は、直接に自分の生活にかかわる政策に対してのみならず、社会全般に関する政策に対しても、自分の所属する組織や政党、あるいは組合代表をとおして、影響を及ぼす立場にいなければなりません。したがって、高齢者が組織を作ることは奨励され、すでに存在する組織から支援されねばなりません。教皇ヨハネ・パウロ二世は次のように強調しています。「社会に対して責任を負う人たちは、高齢者の、とくに社会的にも経済的にも恵まれていない高齢者たちの、当然な言い分や表明を認めてほしいと思います」(7)。

今日の社会にあって、すべての分野を脅かす無関心という文化、過度の個人主義、過当競争、功利主義などを阻むために、また、各世代間のあらゆる分離を避けるために、新しいメンタリティー、新しい習慣、新しいあり方、新しい文化を成熟させることが必要です。人格とその尊厳を中心とする目標をめざす福祉と社会正義が追求されなければなりません。

四　教会と高齢者

「高齢者の生涯は……人間の持つ価値の尺度に光を投じてくれます。世代の継続を明らかにし、神の民の相互依存を驚くほど鮮明にしてくれます」(8)。神の愛の計画を共有するために、教会には実にさまざまな世代が呼び集められています。それはまた聖霊のおかげで、一人ひとりが豊かに持っているたまものを、相互に交換し合うためです。高齢者がこの交換の場にもたらすものの一つに、宗教的、倫理的な価値観があり、それはキリスト教共同体の生活、家庭生活、そして世界のために、精神的な豊かな財産となります。

お年寄りの生活の中で際立つ特徴は、宗教的実践です。高齢期はあたかも、人間の可能性を超えるものに向かって、特別な突破口を見つける時期であるかのようです。いろいろある中で、お年寄りの熱心で充実した典礼祭儀への参加にそれがうかがわれます。また、長い歳月、教会

から遠のいていた後、ある日突然、教会に戻ってくる多くのお年寄りがいることもその一つです。祈りのためにとっておかれた場所は、教会がそこからあふれるほどくみ上げる、念禱といけにえの霊的資源の宝庫です。教会共同体と家族の中で、それは再評価されるべきです。

たびたび単純に――だからといって深みがないというのではなく――体験されたお年寄りの宗教心は、それまでの人生で生きてきた信仰の強さにもよりますが、男女を問わず、かなり多岐にわたります。

時として、その宗教心はある種の運命論を含んでいます。そのような場合、人生のこの時期に来て強いられる苦しみ、限界、病気、記憶喪失を、神の罰とまでは思わなくとも、もはや好意に満ちてはおられない神のしるしだと見てしまいます。教会共同体は、このような運命論を一掃して、お年寄りの宗教心をはぐくみ、その信仰に希望の光を取り戻す責任を負っています。

この仕事における信仰教育の最初の役割は、畏怖を覚える神のイメージを薄め、お年寄りが愛の神を発見するよう手伝うことです。聖書に親しみ、わたしたちの信仰の内容を深め、キリストの死と復活を黙想することは、父なる神の愛とは何のかかわりもない懲罰的な神概念を克服させるために、お年寄りを助けるでしょう。キリスト教共同体の典礼の祈りと秘跡にあずかり、互いに共同体的生活を共有しながら、お年寄りは、主が人間の苦しみを、また個人の労苦

を平気で見ておられるようなかたではないことを理解するようになるでしょう。

高齢者にイエスの良い知らせを告げることは、教会の務めです。イエスは、老いたシメオンとアンナにご自分を啓示されたように、高齢者にご自分を現し、その現存をもって彼らを力づけられます。イエスは、高齢者が生き生きと心に保ち続けてきた期待と約束の成就を告げ、内面的な深い喜びで彼らを満たされます(ルカ2・25－38参照)。

お年寄りに、できる限りキリストと出会う可能性を提供し、彼らが受けた洗礼の意味を再発見するよう助けるのは、教会の務めです。洗礼によって、彼らはキリストとともに葬られ、その死にあずかるものとなりました。それは「キリストが御父の栄光によって死者の中から復活させられたように、わたしたちも新しいいのちに生きるためです」(ローマ6・4)。そしてキリストのうちに自分の現在と未来を見いだすためです。希望は、神の霊、「イエス・キリストを死者の中から復活させ」、またわたしたちの死すべき体に生命を与えてくださるかたの現存に対する信仰に根を下ろしています(同8・11参照)。洗礼のうちに新しく生まれるという認識があれば、創造において、またあがないにおいて顕示された神の愛の神秘を前にした高齢の人の心から、幼子のような驚きの念が消えることはないでしょう。

高齢者に、彼らにもまた、歴史におけるキリストの連綿たる現存の神秘を人々に示して、キ

リストの福音をのべ伝える役割があることを認識させるのは、教会の務めです。さらに、高齢者が、人間になさった約束をつねに誠実に守られる神を、人間社会とキリスト教共同体にあかしする者としての責任を自覚するようにしむけるのも、教会の務めです。

高齢者のための福音宣教、あるいは再福音宣教の司牧は、まさにその年齢特有の霊性の成長をめざさねばなりません。すなわち、高齢者固有の霊性とは、イエスご自身が年老いたニコデモに示された霊性です。イエスは彼に、老いに阻まれず、つねに新しい希望に満ちた生命によみがえるために、聖霊のたまものに心を開くよう促されました。「肉から生まれたものは肉である。霊から生まれたものは霊である」(ヨハネ3・6)。

キリストはその生涯のあらゆる局面で、すべての弟子たちを聖性の高みへと誘っておられます。「あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい」(マタイ5・48)。高齢の人たちにも、不本意ながら、歳月を経るほどに意気と熱意がしぼみそうになるときもあるでしょう。だからこそ、それまでにもまして、あのしきりに心をいざなってやまないキリスト教的聖性を求めて生きてゆくのです。キリスト信者は、その霊的歩みを無気力や疲労にじゃまされてはならないのです。

高齢者のためのこの司牧を推し進めるには、人間性と霊性にあふれ前期高齢者と後期高齢者

に歩み寄り、人間的に、社会的に、文化的に、精神的に、しばしば非常に個人差のある彼らの期待を受け止めることのできる司祭、老人福祉を支える人たち、ボランティア――青少年、成人、高齢者自身を含む――の養成が必要です。

高齢の人たちとその霊的要求にこたえるには、いくつかの専門化された司牧分野も考慮に入れなければなりません。それは家庭に関する司牧――高齢者とその家族との関係は、ただ日常的、物質的範囲にとどまらず、宗教生活にまで及ぶ――から社会的司牧、介護、保健に携わる人々の司牧にまで広がります。

この司牧に従事するために欠かせないのは、高齢者自身の協力と寄与です。高齢者は信仰と、人生において得た富から、彼ら自身の利益となるのみならず全共同体の利益となる、古く、また新しいものを引き出すことができます。高齢者は教会の司牧的配慮をただ受けるだけの人間ではなく、何よりも、自分と同年輩の人たちの中にあって、かけがえのない使徒となります。というのも、人生のこの時期を生きている者が持つ問題とその気持ちに、彼らほど通じている者は他にいないのですから。高齢者たちの中にあって、人生の証言という形で遂行される高齢者の使徒職は、今日、特別な重要性を帯びています。教皇パウロ六世の使徒的勧告『福音宣教』41項の中に書かれているように、人は、「教師の言うことよりも、あかしをする人の言葉

を喜んで聞きます。教師の言うことを聞くときは、教師があかしをする人だからです」。したがって、信仰のうちに生きられるなら、高齢期は、人生の中で得る深い意味のすべての美しさに満ちています。それをつまびらかに示すことは、二次的なことではないのです。そして、高齢者が高齢者へ、高齢者が子供たちの世代へ、さらに孫たちの世代へと、直接に神のみことばを告げることも、二次的なことではありません。

ことばと祈りをもって、だが何よりも、老齢から生じる不自由さや苦痛を甘んじて受けることによって、高齢の人たちはつねに、キリスト教共同体と家庭で、時として、真の迫害ともいえる状況の中で、雄弁な信仰の証人、伝達者であったし、今もあり続けています。たとえば、二十世紀の共産主義圏における無神論的全体主義体制のもとにおいては、そうでした。旧ソ連の「バーブシュカ(おばあさんたちの意)」のことを聞かなかった人がいるでしょうか。どんなささやかな信仰表現も犯罪活動と見なされていた、あの長い歳月の間、彼女たちはキリスト教信仰を生き生きと守り続け、孫たちの世代にそれを伝えました。勇気のあるこの「おばあさんたち」のおかげで、元共産主義体制の国々で信仰は全滅せず、今日も、ごくわずかながら、新たな福音宣教のための基礎が存在します。「国際高齢者年」は、こういう並外れた男女高齢者像と、彼らの沈黙の英雄的証言を思い出す貴重なチャンスです。教会だけでなく、人間文明も

彼らに負うところ多大です。

高齢者が福音宣教の仕事に積極的に参加するのを推進するために、重要な役割を担っているのは、「現代の教会への聖霊のたまものの一つ」(9)である教会の組織や運動です。わたしたちの小教区に現在ある幾つかの組織の中に、すでに自分たちの養成と仕事、そして使徒職の大きな可能性を持つ領域を見つけたお年寄りがたくさんいます。この人たちは、キリスト教共同体内部で、正真正銘の主人公になっています。高齢者の世界の中でとくにめざましい働きをしている集団やグループ、共同体もあります。彼らの持つカリスマのおかげで、これらの事実は、さまざまな世代間の一致を生む環境作りと、高齢者をやる気にさせ、霊的若さを保つのを助ける精神的風土作りに一役買っています。

五　高齢者司牧のための指針

「現代の人々の喜び、希望、悲しみ、苦悩」(10)を共有しながら、福祉および社会事業をとおして、高齢者に母として心を配り、骨身を惜しまない教会は、この人々が福音宣教という使命を続行していくように願っています。高齢になってもそれはできますし、また、しなければなりません。それどころか、高齢であればこそできる特有の、独自の福音宣教があります。

教皇ヨハネ・パウロ二世は、シノドス(世界代表司教会議)後の使徒的勧告『信徒の召命と使命』48項の中で次のように書いています。「今日、世界中のいろいろな国での高齢者と退職者の増加は、高齢者に使徒的活動の新しい機会を提供しています。これは、もはや帰らぬ過去を懐かしんで閉じこもったり、移り行く世にあって出会ういろいろな困難のために責任から逃れようとする誘惑を断固退けながら、勇気をもって担うべき任務です。教会と社会における役割

は、ある年齢によって終わるものではなく、ただ新たな形を取るだけのことだということを絶えず明確に自覚しておかなければなりません。……『高齢に達することは、一つの特権です。それは、皆がこの年齢まで達する幸運に恵まれていないからだけではなく、何よりも、過去をもっとよく反省し、過越の神秘をよく知り、より強く体験し、神の民全員のために、教会における一つの模範となることが可能だからです』」。

教会共同体としては、高齢の人たちが信仰を伝承する証人（詩編44・2、出エジプト記12・26－27参照）、人生の師（シラ書6・34、8・11－12参照）、愛徳を行う者として表現する「たまもの」を高く評価して、彼らの参加に期待し、それにこたえられる方策を打ち出す必要があり、それゆえ、高齢者司牧を、高齢者の活動と協力に開かれた場として再考するよう求められます。

教会において、高齢の人たちがあかしするのを手助けできる分野の中で、次のことを忘れないようにしましょう。

社会福祉活動――大部分の高齢者は、ボランティア組織の活動やプログラムに、余暇と自分の才能を寛大に供与するだけの体力、知力、精神力を十分に持っています。

使徒職――高齢者は、カテキスタとして、キリスト教的生活の証人として、福音を告げ知

らせるために寄与することができます。

典礼 ―― 多くの高齢者たちは、すでに、典礼の執行される場所での世話役を効果的に果たしています。もし適切に養成されるなら、より多くの高齢者が終身の助祭の役目につき、朗読奉仕や祭壇奉仕の役務を果たし、聖体奉仕者になることができるでしょう。また、典礼、聖体礼拝、信心業の推進者、とくに聖母と諸聖人に対する崇敬の忠実な指南役を務めることもできるでしょう。

教会内の種々の協会や運動 ―― とりわけ第二バチカン公会議後、信仰生活の共同体的次元は、高齢者に向けて大きく開かれました。教会を大いに豊かにした教会内部の多くの共同体や組織の増大は、多世代を融合し、聖霊のさまざまなカリスマの見事さと豊かさを示しています。

家庭 ―― 高齢者は、自分より若い世代の人たちのために、「歴史的記憶」を表現し、人間の基本的価値を支え、伝える人です。記憶がなければ根源もないし、それゆえに、現在の境界を越える未来に希望をもって自分の影を映すこともできません。家族、そして社会全体は、高齢者の教育的役割を再評価するなら、大きな利益をそこから得るでしょう。

観想と祈り ―― 高齢の人たちが、神のみが知っておられる自分の余命を、聖霊に導かれて新しい使命にささげるよう、促し、駆り立てるようにしなければなりません。こうして、主の

復活の神秘の光に照らされ、より豊かで、より幸先のよい一区切りを再び歩み始めるのです。これに関して、教皇ヨハネ・パウロ二世は、高齢化をテーマにした国際フォーラムの参加者たちにあてたメッセージの中で次のように言っています。「人生の結実である賢明さと経験をもって、高齢者たちは、並外れた恵みの時期に差しかかりました。それは、祈り、神との一致に開かれたまたとない時期です。新しい霊的力は、自分のいのちを、いのちの与え主である主への熱烈なささげものとし、他者への奉仕に注ぐよう高齢者たちに授けられています」(11)。

試練、病気、苦しみ――これらの経験は、教会と世界のために、キリストの受難を自らの心と肉体で「全うする」時を表します(コロサイ1・24参照)。高齢の人たち、また、彼らだけでなく他の人々が、神のみ手への委託を、主の手本にならって証言するよう導くことは重要です。しかしそれは、高齢者が自分は敬われ、愛されていると感じる、その度合いにおいてのみ可能です。いちばん弱い人たち、苦しむ人たち、自力では体さえ動かせない人たちに留意するのは、教会の義務であり、真の母性的態度の現れです。したがって、一連の福祉・介護サービスはすべて、高齢者が自分は役立たずで、人に迷惑をかけるばかりだと感じることなく、むしろ自分の苦しみを、神の神秘と人の神秘との出会いの可能性として生き抜くために、提供されなければなりません。

「生命の文化」のための努力 ―― 病気と苦しみの時は、生命の神聖さと不可侵性という、他に譲れない原理に引き戻される、まさにそういう時なのです。イエスの使命そのものが、多くの病人をいやすことであったのをみれば、神がどれほど人間の肉体的命をも心に留めておられるかが分かります(ルカ4、18参照)。しかし、人間は自分の意志で、生きるか死ぬかを決めることはできません。人を生かすか死なすかを決めるのは、わたしたちがその中で「生き、動き、存在している」生命の主だけです(使徒言行録17・28、申命記32・39参照)。現世を超絶するものを排除したり無視するのは、現代の特徴ですが、それは快感と壮健さだけを尺度に生命を評価して、苦しみを、何が何でもそれから解放されねばならない、耐えがたい重荷と見なしているからです。新しい経験、興味深い経験がまだ手付かずに残されている未来を、突如として中断する死は、「不条理」と見なされ、苦痛のうちに呻吟する人生は無意味だ、と見なされるときに、死は「正当な解放」となります。これが安楽死という悲劇の文化的な背景です。教会は、安楽死を「神のおきてに対する重大な違反、すなわち、意図された殺人であり、人間として倫理的に容認できない」(12)として、これを否認します。

高齢の人たちの生活の状態と条件の多様性を考慮に入れて、前期高齢者と後期高齢者の司牧には、その目標達成のために、次のようなことが含まれます。

■高齢者が必要としていることをよりよく気づかせるだけでなく、高齢者が自分の条件に見合う活動によって、共同体の生活に寄与できることを知らせることです。これを知れば、適切な形の参加を整え、練り上げ、文化的に、福音的に、また教会の社会福祉事業の刷新という観点からしても、より効果ある選択に向けて、教会共同体と市民共同体を敏感にし、巻き込むことができます。

■積極的参加や共同責任について無関心であったり、不信を抱いたり、また、これを断念したりする態度を克服するよう、高齢者を元気づけることです。

■差別をせずに、高齢者をキリスト教共同体の中に溶け込ませることです。すべての受洗者は、生涯、絶えず自らの洗礼の恵みという富を新たにし、それを最大限に生きることができなければなりません。だれも、「神のみことば」を告げ知らせもせず、祈りと神の恵みのたまものもなく、愛徳の証言もせずに済ませてはならないのです。

■高齢の人たちのそれぞれの能力を生かし、彼らの参加を助け、促すような形の共同体的生活を組織することです。これをめざして、教区はその事務局に高齢者に対応する部署を設置し、小教区は高齢者のための霊的、共同体的リクレーション活動を鼓舞することです。教区および小教区評議会内部や財務評議会内部において、高齢者福祉介護サービスが促進されるよう

に。

■高齢者が感謝の祭儀に容易に参加し、ゆるしの秘跡に近づき、また、高齢者の巡礼、月の静修、大黙想が行われるよう配慮することです。高齢者のこれらの行事への参加が、随伴者の不在や建物のバリアなどが原因で断念されることがないように。

■病人、寝たきりの人、老人性痴呆の人の医療・介護サービスは、信仰による交わりと祈りという仲介的しるしを通じて行う霊的介護でもあります。人は、最低の状況にあっても、生命の、譲渡できない価値、何ものにも代えがたい価値をあかししていることを思い起こすことです。

■病者の塗油の秘跡と臨終での聖体の授与に際しては、授ける前に、適宜に教理を説明し、その準備をさせて、特別に心を配ることです。事情が許すなら、司祭が、教区であるいは老人福祉施設内で、共同体の中で病者の塗油の秘跡を行うのは望ましいことです。

■宗教的な配慮や人道的な慰めも励ましもなく、死の危険が迫っている人を一人放置しておく現代の傾向には反対することです。この任務は、基本的には司祭の役割であるとはいえ、その人の家族と所属する共同体の役割でもあります。

■特別に注意を払うこととして、他宗教に属する高齢者に対しては、愛徳と対話の精神に基づ

いて、彼らが自らの信仰を生きるように助けます。他方、無信仰の高齢者に対してキリスト者は、友愛と連帯の精神をもって、自分の信仰のあかしをその人にしなくてはなりません。

■お年寄りは、社会の中に自分の居場所を見いだす権利があります。ましてや、家庭の中で敬われる居場所を見いだす権利を持っているのは当然です。家族にこれを思い出させることです。人々が一つになって生活するように作られている家庭には、愛を守り、示し、伝える使命があることを思い起こさせるのです。家族の中で、お年寄りを含む、いちばん弱い者を、愛情で包み、助け、養う家庭の義務を主張することです。そして家庭への相応の支援の必要性、すなわち、経済的補助、保健医療サービス、住宅、年金、社会保障に関する政策を要求することです。

■公共および民間の老人ホームや養護施設で暮らしているお年寄りたちに関心を寄せることです。もし、小教区共同体が高齢者たちとのきずなを維持していれば、血を分けた肉親からの離別でお年寄りが受ける心の傷をいくらかは和らげられるでしょう。小教区共同体は「家庭の中の家庭」であり、高齢者たちと彼らの抱えている問題に取り組む、「福利厚生機関」のようなものでなければなりません。先にあげた諸施設の責任者と協力して、ボランティア組織の支援、文化的催し、宗教的ケアを保証する適切な方法を模索することも必要です。宗教

的ケアについては、お年寄りが聖体で養われるように保証します。聖体拝領は、「主の日」の祭儀に参加することを意味し、神の父性のしるしであり、いのちと苦しみの豊かな実りのしるしです。このいのちと苦しみのもたらす豊かさも、もし、主の慰めと力に照らされなければ、悲しみと絶望のうちにその実りを失わせる危険があります。

■高齢者の中には、教会の役務者、キリスト教共同体の司牧者である司祭たちがいることも忘れないでください。教区は高齢の司祭たちのために対策を立て、ふさわしい住まいを準備するなどして、高齢の司祭たちを扶養します。小教区共同体も高齢の司祭たちが、高齢のため、あるいは健康上の理由で活動的役務から引退した後、適切な余生を送れるよう協力しなければなりません。修道者共同体とその上長者たちに対しても同じことがいえます。男子修道会も女子修道会も、高齢の会員たちを特別に世話しなければなりません。

■小教区に所属する諸グループ、団体、運動にかかわっている青少年に、教会共同体の高齢者に対する連帯を意識させるよう教育することです。その連帯感は、青少年がお年寄りを仲間に入れ、話し相手となり、全世代を包み込む形で表現されます。お年寄りたちを巻き込む好機を逃さない青少年は、この経験が自分たちを形成し、成熟させ、他人に気配りのできる大人にし、人生に有益であることを覚えていきます。エゴイズム、拝金主義、消費主義が蔓延

する社会では、メディアも人間のいや増す孤独をせき止めるには役立ちません。無償、献身、連帯意識、もっとも弱い者へのいたわりと尊敬の念などの価値こそ、新しい一つの人類の誕生をめざす者にとって、したがって、青少年にとっても一つの挑戦を意味するのです。

高齢者にかかわる司牧活動全般のために、とくに啓発的で役に立つ不動の基準となるのは、第二バチカン公会議文書『信徒使徒職に関する教令』のほかに、近年来、教会の教えとして発行された諸文書、とくに、一九八〇年に開かれたシノドス後に発行された、教皇ヨハネ・パウロ二世の使徒的勧告『信徒の召命と使命』、同教皇の使徒的書簡『サルヴィフィチ・ドローリス―苦しみのキリスト教的意味―』、使徒的勧告『家庭―愛といのちのきずな―』です。

結び

前期高齢者と後期高齢者の世界をひととおり見てきましたが、高齢者に関する多くの問題が明らかになりました。市民共同体としては、一定の目標に向けた介入が、また教会共同体としては、司牧的に特別な配慮が緊急に必要です。一方、高齢の人たちが、教会と社会に寄与するために、豊かな人間性と賢明さを持っていることも明らかになりました。

お年寄りと一緒に歩き、お年寄りに歩み寄るのは、わたしたち皆の義務です。高齢者に対する考え方を実際に変えるために、また、高齢者が共同体の中で占めるはずの場を高齢者に返すために、行動し始めるときはすでに来ています。

社会とその制度は、高齢者に養成と参加のための適切な場を開放し、正義と自由のもとで尊厳をもって生きる、という人間の多様性に対応し、必要に応じた社会福祉、医療、介護サービスの形態を保証するよう求められています。その目的遂行のためには、共同善を守り、推進する国とともに、補助性の原理に則して、キリスト教的愛徳に鼓舞されたボランティア活動とイ

ニシアティブの参与が大切にされ、生かされなければなりません。

教会共同体は、高齢者が信仰の光に照らされて自らの老いを生き、彼ら自身が、他の人々への奉仕に役立てる能力をまだ持っていることを再発見し、他の人々に供与する責任があることを自覚するよう、彼らを支援しなければならないのです。高齢者が、自分にはまだ築くべき一つの未来があることを、ますます認識するようになってほしいと思います。というのも、高齢者は、子供たちに、青年、壮年の人たちに、そして同世代の高齢者たちに、キリストから離れては、個人の生活にも他の人との生活にも意味がなく、喜びもないことをあかしする使命をまだ終えていないからです。

「収穫は多い」（マタイ9・37）。主のこのことばは、高齢者のための司牧分野にとくに当てはまります。この分野は、その広大さのゆえに、多くの使徒たち、老人福祉を支える人たち、あかしをする人たちの寛大な、熱のこもった働きと努力にまつところが甚大です。この人たちは、「岩」であるキリストに土台を据えていれば（マタイ7・24－27参照）、人生のこの時期を特徴づけることのできる豊作を確信する人たちです。

この卓越した真の模範は、現代人にとって偉大な証人でもある教皇ヨハネ・パウロ二世です。現教皇は、ごく自然に年を取っておられます。ご自分の年齢を隠さず、平然と皆の前に立って

おられます(つえをつき、冗談をとばしておられる教皇を見なかった者がいるでしょうか)。飾り気のない単純さで、ご自分のことを「わたしは老司祭さ」と、事もなげに言われます。教皇は、信仰のうちに老いを生き、キリストからゆだねられた任務を、年齢に左右されずに果たしておられます。現在七十八歳を過ぎておられますが、その年齢も、教皇から精神的若さを奪うことはできないようです。身体の衰えは否めないものの、聖ペトロの後継者としての使命に傾ける情熱はいささかも衰えていません。五大陸にまたがる彼の使徒的旅行は、なおも続いています。さらに驚くべきことは、教皇の言葉はますます力を帯び、いまだかつてないほど人々の心を魅了し、獲得しています。

高齢者の人たちとともにするこの歩みは、彼らの必要とカリスマの多様性を心に留め、参加を呼びかけ、一人ひとりの能力を生かすよう努める一人の牧者が同伴しているとき、全教会の豊かさを示しています。したがって、全世代間の心と、受けたたまものの深い意味をとらえ、勇気をもって歩み始めたいものです。

国連によって高齢者にあてられ、聖年への準備にいそしむ一九九九年は、父なる神にささげられた年でもあります。この摂理的な一致は、若い世代にとっては、自分の父親との関係を熟慮し、反省する機会となり、もう若くはない者にとっては、自分の人生を顧みて、証言の喜ば

しい展望を据える機会となりえます。「キリスト者の生活全体が御父の家への大巡礼のようなものであり、わたしたちは日々、あらゆる人間に対する御父の無条件の愛を新たに見いだしています」(13)。

神の民を、キリスト紀元の第三の千年紀へと導く聖年、二〇〇〇年の九月十七日は、高齢者にささげられる一日となるでしょう。* この大事な約束の日に、だれも欠けることがないように期待しています。そして、高齢者の、参加し、希望を与え、希望を受けるその能力をますます、そして数多く引き出し、高齢者の要求にこたえるイニシアティブが――地域レベルで、教区レベルで、国家レベルで、国際レベルで――大聖年の展望によってもたらされることを信じています。というのも、ひとえに、高齢者とともに、高齢者のおかげで、主へのよろこばしい賛美は代々に歌われることができるのですから(詩編79・13参照)。

一九九八年十月一日　バチカンにて

教皇庁信徒評議会
議長　ジェームズ・フランシス・スタッフォード枢機卿
局長　スタニスラオ・リルコ司教

注

(1) 国連の経済社会問題局人口部は、一九九八年十月二十六日、人口統計に関する今日の推定と予測を発表した。それによると、高齢者の数は増加の一途をたどっている。とりわけ、現在世界中に六千六百万人いる八十歳以上の人は、二〇五〇年には三億七千万人に達すると予測しており、そのうち百歳以上の人は、二百二十万人になると推定している。

(2) 国連の最近の研究によれば、向こう二、三十年間の人口増加の予測は、ますます下方修正されている。国連人口基金（ＵＮＦＰＡ）は、一九九八年の世界の人口状況に関するレポートの中で、人口統計学上、下降に転じたことを確認している。もはや、高い出生率を保っているのは、アフリカ諸国の限られた国のみである。他の地域では、アジアからラテンアメリカまで、出生率はますます低くなっている。

(3) これらの原則と国際行動計画の第五修正案、および一九九二年に国連総会によって採択された戦略の修正案の適用は、「二〇〇一年に向けた高齢化に関する地球的目標」を制定している。

(4) *Insegnamenti di Giovanni Paolo II*, VII, 1 (1984) 744.

(5) *Insegnamenti di Giovanni Paolo II*, V, 3 (1982) 125.

(6) 教皇ヨハネ・パウロ二世「パレルモで開かれたイタリア教会第三回大会での講話」(*L'Osservatore Romano*, 24 novembre 1995, 5)。

(7) *Insegnamenti di Giovanni Paolo II*, V, 3 (1982) 130.

(8) *Insegnamenti di Giovanni Paolo II*, III, 2 (1980) 539.

(9) 教皇ヨハネ・パウロ二世「聖霊降臨の主日前晩のミサにおける説教」(*L'Osservatore Romano*, 27-28 maggio 1996, 7)。

(10) 第二バチカン公会議『現代世界憲章』1(*Gaudium et spes*)。

(11) *Insegnamenti di Giovanni Paolo II*, III, 2 (1980) 538.

(12) 教皇ヨハネ・パウロ二世回勅『いのちの福音(一九九五年三月二十五日)』65(*Evangelium vitae*)。

(13) 教皇ヨハネ・パウロ二世使徒的書簡『紀元二〇〇〇年の到来(一九九四年十一月十日)』49(*Tertio millennio adveniente*)。

＊編集部注　教皇庁は大聖年の行事の一環として、二〇〇〇年九月十七日(年間第二十四主日)を「高齢者の祝祭」の日としている。

あとがき

本書は、教皇庁信徒評議会が「国際高齢者年」に向けて一九九八年十月一日に発布した指針です。教皇庁は、国連の「各世代がそれぞれ他の世代と一致して貢献する」という趣旨に賛同し、協力したいと願っています。具体的には、それぞれが「それぞれの権限と義務に応じて、相互補助の理念に従って」高齢者の問題にかかわってほしいと言っています。

高齢者社会に入りつつある現代にあって、一人でも多くのかたが高齢期の意味とその使命についての認識を新たにしていただければ幸いです。

日本語への翻訳は、イタリア語版 *La dignità dell'anziano e la sua missione nella Chiesa e nel mondo* を使用し、必要に応じて英語版を参考にしました。末尾ながら、翻訳の労を取ってくださった、吉向キエ氏に厚くお礼申しあげます。

一九九九年七月

カトリック中央協議会出版部

・聖書の引用は原則として『聖書 新共同訳』（一九九七年版）を使用いたしました。ただし、漢字・仮名の表記は本文に合わせたことをお断りいたします。

教皇庁 信徒評議会
高齢者の尊厳と使命

1999年8月10日第1刷発行
1999年12月20日第2刷発行
日本カトリック司教協議会認可

訳者　吉向キエ
発行　カトリック中央協議会
東京都江東区潮見2-10-10 日本カトリック会館
〒135-8585　☎03-5632-4411

事前に当協議会事務局に連絡することを条件に、通常の印刷物を読めない、視覚障害者その他の人のために、録音または拡大による複製を許諾する。ただし、営利を目的とするものは除く。なお点字による複製は著作権法第37条第1項により、いっさい自由である。

ISBN4-87750-092-8 C0016

カトリック中央協議会

ISBN4-87750-092-8
C0016 ¥240E

定価(本体240円＋税)